

わたしの問い続けてきたこと (下I)

— わたしの信仰 —

目次

| | | |
|---|-----------------------------------|-----|
| 一 | はじめに | 1 |
| 二 | いくつかの体験 | 7 |
| 三 | イエス・キリストとの出会い | 19 |
| 四 | 無視できない問題 | 43 |
| | I 分派について | 50 |
| | II 「聖書的」ということ―信仰に於ける「信」と「知」― | 55 |
| | III カール・バルト、ルドルフ・ブルトマン、エミール・ブルンナー | 72 |
| | IV キリスト教の絶対性について | 140 |
| 五 | あとがき | 177 |

一 はじめに

イエスは、フィリポ・カイサリヤ地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」イエスは言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」

— マタイによる福音書一六章一三節以下 —

他人の言葉でなく、それぞれ自分の言葉で「わたしの何者であるかを」語ってみよ、とイエスは弟子に迫られた。

そのときペテロが答えた。「あなたはメシア、生ける神の子です。」すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言っておくあなたはペテロ（岩）。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。……」

— マタイによる福音書一六章一六節以下 —

弟子に対するイエスは気魄きはくに満ちている。その答えの如何によっては弟子を一喝されたに違いない。しかし、ペテロは見事に応えた。

ペテロの言葉は自我から生じたものではない。つまり、この世の一切の思考の枠内から生じた言葉ではない。ペテロの言葉は全ての根源にあつて命たぎる世界から現成してきた言葉である。それゆえにイエスは、「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と言われた。

にもかかわらず、このペテロの告白が、いつの間にか「キリスト教会」の「信仰告白」として信条化され、教条的に固定化され、日常的な自我による形骸言語と化してしまった。

「あなたはイエス・キリストを神の独り子救主と信じますか」

「はい、信じます」

こうして、教会公認のキリスト信者が簡単に誕生する。

×

×

信条又は信仰告白として定式化された言葉は、それがどれほど美しく整っており、真実を語っているように見えても、それは根拠無き虚構の言葉である。ただ空しく響くのみである。このような祈りや美文調の言葉が職業的な宗教人の口から、まさに立て板に水を流す如くに流暢に抑揚

を伴って出てくるのを耳にした経験を誰もがしている。

×

×

信仰の人は、その信じる事柄との関わりに於いて主体的かつ自覚的な者である。その真実との関わりに於いて、評論家的態度は許されない。また他律的教条主義的態度も許されない。更に、主観主義的独善も許されない。

評論家的態度とは、事柄との関わりに於いて傍観者として立つということである。そのような者は物事を客観視し、それに関係を持つとうとしないでただ第三者として眺め、主観的に価値判断すること、その事柄を知ったと思ひ込む。所謂「専門家」と称される類の者がときとしてこのような者である。彼がどれほどの分析と解釈を熱心且つ厳密に行つたとしてもその態度では事柄の真実に触れることは出来ない。

他律的教条主義態度とは、一つの教えを一意的に理解してそれを神格化し、絶対化したそれ自身が生きる唯一の規範または根拠とする態度のことである。一つのイデオロギーに盲従する政治的な熱狂主義者や教典の文字面を盲信する宗教的熱狂主義者もその類である。

主観主義的独善とは、言わば信念に生きる者の姿である。自分の思ひ込みに強固に止まつてそれ以外の思考も判断も出来なくなつてしまつた状態の者である。

以上の態度に共通していることは、そのような自分自身の姿に気付いていないことである。そ

れ故に、自分自身の姿に気付いている在り方を、主体的且つ自覚的在り方であると、ここでは一応了解しておこう。

X

X

しかし、イエスが他人の言葉ではなく、自分の言葉で「わたしが誰であるかを語ってみよ。」と弟子に迫られ、その応答を求められたのには深い意味がある。

端的に言うなら、イエスは弟子たちを一切の観念からの解放を促されたのである。

人はさまざまな観念の渦の中におり、事実観念の虜になっているのが私たちの日常的生の実態である。

物事に関わる時、そのものについて自分が持っている観念が現実に優先してあり、それによって現実を規定する在り方が、観念の虜になっているということである。別な言い方をするなら、「存在の本質を先ず観念性で見、その観念性で存在の在り方をこちらから決定しようとするのである」。

例えば、リンゴを見ると、私たちは目の前にあるリンゴを事実見るのではなく、すでに自分が観念で構築したリンゴという概念で「これはリンゴだ」と判断しているのである。それが証拠に、目の前にあるリンゴが、自分が持っているリンゴの概念に合わなければ、「これはリンゴではない」と言わないまでも「このリンゴは変なリンゴだ」と言うであろう。

よくよく反省してみると、「リング」なる物はもともと何処にも無いのである。あるのは「リング」と人が名付け、リングという概念をこちらから決定した当のそのものが言葉としてあるだけなのである。従って「リング」と名付けられた当の物が言葉を発するなら次のように言うに違いない。

「誰が、わたしを『リング』と決定したのだ。わたしはわたしであって『リング』などではない。勝手にわたしを『リング』と概念規定しておいて、それにそぐわないわたしが有れば『変なリングだ』等と言う。全く勝手なことを言ってもらっては困る。よくよく言っておくが、わたしはリングなどではない。わたしなのだ。よく目を覚まして事実を見よ。現実に即さないお前たち人間の勝手な観念で存在を規定してもらっては困る。はなはだ不愉快だ。当の私を見てリングを見たと思ひ込んでいるその傲慢と欺瞞から解放されなければ、お前たち人間は永遠に真実を見ることは出来ない。わかったか！」

×

×

本当にそのとおりだと思う。一切の観念から解放されて素直にその物、その事の前に自分自身で立ち関わること。これこそ主体的且つ自覚的在り方なのである。パウロはその在り方を「自由」と言った。

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。

自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです。だから、しつかりしなさい。奴隷の軛くびきに二度とつながらずはなりません。

—ガラテヤの信徒への手紙五章一節—一三節—

「ここでパウロが言う「奴隷の軛」とは、人間が、そのものをそのものとして見ることなく、自我の観念で全てを見、それを正しいとする在り方のことだと解しておく。」

そしてイエスは言われた。

わたしの言葉にとどまるなら、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。

—ヨハネによる福音書八章三一節—

X

X

イエスは「わたしの言葉にとどまれ」と言う。そしてとどまるなら「真理を知り、真理はあなたを自由にする」と言われる。イエスの言葉は何時も「事実」をそのままわたしたちに投げつけ、「さあ、よくよく見て悟れ」と迫る。その言葉の前で人が自我の想念や観念を働かせ、それによって掴もうと邪心を起こそうものなら、忽ち「事実」は見えなくなる。その意味で、「わたしの

言葉にとどまれ」とは「おまえの自我を事実の中へ放り込み、事実を直接経験し、事実の命に触れよ」ということである。その時、人は一切の自我が構築する観念から解放され、命たぎる世界に開眼させられるだろう。

ペテロの告白は事実を直接に語ったという意味に於いて「神によるものであり、祝福された者」なのである。以下は、このことを手掛りとして、「わたしの信仰」を語ろうと思う。それは自我の観念からの解放、つまり人間性の真の回復の根拠に導かれた有難さの告白でもある。ならば、「わたしの信仰」を語るのも無意味ではないと思う。

二 いくつかの体験

わたしにとって不思議と思われる体験がいくつかある。——不思議とは分別的な悟性（思議）を越えているということ——それらの体験に共通して言える事は、この世を越えた永遠の世界が有限のこの世に介入してくるのを内的体験として覚えさせられることである。

このような内的体験は、この世的な、どの体験よりも魂の深くに影響を与え続け、存在理解と生き方とその方向づけに決定的な刻印となって、今に至っている。その意味で、わたしの人生は、

その内的体験のよって来る根源の秘密を尋ねる求道の旅となった。と同時に「わたしの信仰」を語るとき、その体験を見過ごしては何も語ることは出来ない。

×

×

児童期における体験で、今もなお鮮明に残り、魂の深くに引きずっている出来事が一つある。それは九歳の頃だった。小学校の校庭で集団の遊びから離れて独り、東の方向に歩いていたら、何とはなしに目を大空に向けた。雲ひとつない青空が深く宇宙の中心まで広がっていた。そのときわたしは見たのである。巨大な飛行機のような形をしたものが、二、三百メートルの低空で東北に向かってゆっくりと浮かぶ如くに飛んで行くのを。しかし何の音もきこえない。しかもそれは金属で包まれた物体ではなく透明な水晶のように透き通っており、太陽による反射光をきらめかしながら飛んでいた。あたりは静寂そのものであった。その後、わたしは何事もなかったように授業のため教室に入って行った。勿論、その出来事を誰にも話はしなかったし、今日までほとんど語ることはなかった。だが、その印象は、わたしの児童期のどの体験よりも鮮明に残り、今もなおわたしの心の深くに存在の秘密についての大切なことを語りかけて来るのを覚える。

×

×

今、思えば、それは、ユング的な表現をすれば、無意識的な自己の神話的な実現または表現なのであるかも知れない。しかし、その出来事は「眼に見えない世界」が「眼に見える世界」とは

別に存在するということを、わたしに自覚させた初めての出来事だった。

×

×

「眼に見えない世界」と言えば、わたしは夢の中で度々死者の訪れを受けていた。その後、最もハッキリした出来事は、ある旅先で就寝しているとき、寝苦しさに襲われ気がつくどひとりの女性が枕もとに座っていた。恐ろしくなって明かりをつけると姿は消えた。そのまま再び寝てしまったが直ぐにまたその女性が現れた。今度は眼を覚まし、意を決してその女性に出てきた訳を聞いたところ、「わたしは〇〇神社の林の中で自殺をした者だ」というようなことを話した。

そのうちに消えてしまったのだが、何かを私に訴えたかったのだろうと思う。朝になって、フロントで係の者に、昨夜現れた女性から聞いた神社の名前を聞き、そこへ尋ねて行ってもよいと思っただが、なにか聞くことをしなかった。否、出来なかったと言うべきだろう。今では覚えていた神社の名前を忘れて思い出すことは出来ない。私にとってこの出来事は児童期のあの体験ほど衝撃的な事柄ではなく、人間世界の存在と人間の想念の存続性といったことを考えさせる程度の思い出話の一つとなつてるように思う。

×

×

それにしても、天空で生じた事柄として語りうるものが二つある。一つは、教会の庭での事である。十五年程前になるがその頃、イスラムのスーフイズム（イスラム神秘主義）に関心があつ

て、彼らが神秘階梯の業として行う所謂「舞踏」を我流で毎夜教会の庭で独り行っていた。勿論、誰にも知らせず語ることも無くである。そんなある夏の夜、舞踏をしていると、満点の星空に、どうした事か、いくつもの光の輪が現れて来たのである。その輪は固定静止しているのではなく、ゆっくりだが円を描くように動いているではないか。そして、その出来事は暫く続いた。私は見とれていたが、家内にも不思議な光景を見せようと、戸口から庭に出てくるように呼んだのだが、結局その光の輪は程なく消えてしまい、元の星空になった。ちなみに、スーフイズムに於いて円とその旋回とは象徴的に意味を持っているようである。

スーフイズムに於ける「象徴」はとても大切な位置づけを持っているようだが、聞きかじりの知識を真似ていうなら「象徴とは神的リアリティの運送手段であり、その起源である高次の存在の状態へとわれわれを運ぶことによって、われわれを変容させる。象徴世界と呼ばれるこの高次の存在の状態は、知性的なアーケタイプ（原型）の世界と、感覚的な現象界との出会いの場である。象徴界はアーケタイプ（原型）の世界の反映である。……すべて被造物は象徴である。なぜならば外的感覚によって知覚されたものはすべて内的感覚によって高次のリアリティのサインとして認知されるからである。しかし、神蹟的光の臨在の中で象徴を見るときにのみこの象徴的ビジョンがおこる。」（スーフイイスラムの神秘階梯―ラレ・パウテヤル著）

難しい理屈はともかく、この体験の持つ意味はわたしにとって大切な超感覚的世界を知らしめ

てくれた。

×

×

もう一つの体験とは、十二年程前に京都府の南、奈良県に近い山間の村、和東町の丘陵に座して瞑想していたときに起こった出来事である。午前二時過ぎから石地に正座して瞑想をしていたが、ふと気付くと目線より少し高くに見える山々の稜線が一斉に光り輝きだしたのである。それをどのように表現すればよいのか分からないが、強いて言えば、黄金の光り輝く様子を絵で表現したようなと言えば、少しは近いかもしれない。とにかくその光は燃え立つように、エネルギーを発散するように、まさに発光しているのである。そのうちに正座しているすぐ横に見える樹木までがその樹の姿形になぞって発光したのである。わたしの口から自然に「光っている、山は生きている……」という言葉が唱えるように生じてきた。わたしはまさに恍惚の内に深い安らぎと喜びとを覚えながら座っていた。時間は知らぬ間に過ぎ午前も四時前になっていたが。その間、石地に正座していたにもかかわらず痛みを覚えなかったのも不思議である。

この体験を通して、樹や山に対する私の思いが変わっただけでなく、眼に見える日常的な世界とは別に、眼に見えない命の世界が、眼に見える事物のそこに躍動していることを知ったのである。つまり、私たちの単なる「思惟というものに先立ち、端的に実有しているもの」すなわち、「命のたぎりその事」に一層に開眼させられたのである。そして「そこ」からすべてを見、考え、

出発しなければならぬことを示されたのである。

×

×

ここで、もう一つの体験を語ることをゆるしていただきたい。それは、部屋の中での出来事である。日中であつたが、すこし疲れたので仰向けになつて「うとつ」としていた。どれほどたつたか知らないのだが、突然、天井に大きな文字があらわれたのである。「恐れるな」というその文字は黒の色で行書体であつた。それはあたかも語りかけるように現れたのである。言葉として語りかけたような間だけの顛^{あち}れであつたが、それは鮮明であつた。わたしは畏敬の思いでいっぱいになつた。「恐れるな」というそれを畏れを抱きつつ喜んでいただき、神の臨在を強く覚えたと同時に、ペルシャザル王の酒宴の席に、突然、壁面に現れた文字のこと（ダニエル書五章）を思い出した。そして、そこで起こつた出来事を少しは了解出来る思いがした。

×

×

以上、わたしのいくつかの体験をランダムに語ってきたがそれらの体験を通して「見える世界」とは別に「見えない世界」があり、その「見えない世界」は、こちら側の意識の負荷を少なくすれば、自分の却下に「こと」として姿を現すということ、即ち、私に起こつた不思議な出来事の「こと」は、思考や思惟に先だつて現有するものの事実性の中にあるそれであるということである。さらに堅く言えば、「分別的な悟性を越えて知的直観的地平に於いて顛^{あち}わとなる」それ

であると言えよう。その意味で、現れた出来事の一つ一つに執とられてしまつては、ことがらの本質を見失つてしまふ。しかし、人はそれが起こつたそれにのみ眼を向けるだけで、「実有するもの」の事実あるという「こと」に眼を向けない。

×

×

分別的な悟性（思議）では承認しがたい不思議な事に出会ふとき、人はその出来事のみに関心を向け、その事が秘めている事柄に注目しない。それは、「指が月を指すに、肝心の月を見ないで指だけを見る」愚かに似ている。これはイエスが行つた「奇跡」という不思議な出来事にたいして、当時の律法主義的宗教人らが、出来事が指示している「実有するものの事実有るといふ『こと』」——この『こと』とは、イエスの場合は「神の支配」そのことである（「神の支配」については「イエスの信仰」参照）——に開眼することなく、ただ出来事の是非を論じるだけに留まる愚かと同じである。イエスは彼らの愚かを「見ても見ず、聞いても聞かず、理解出来ない」と嘆かれ、預言者イザヤの言葉を用いて次のように言われた。

あなたたちは聞いてはいるが、さとらず、見てはいるが見抜けない。この民の心は鈍くなり、その耳はふさがれ、その目は閉じられている。そうでなかつたら、自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟つてわたしのものに立ち帰り、わたしに癒してもらえるのに。

人は聞くとき、聞いたその事に執れ、見るとき、見たその物に執れる。そして、そこに留まり、そのことの真偽や是非を騒ぎ立てる。しかしこれほど空しい議論はない。例えその出来事が「真」であつても、また「偽」であつたとしてもその空しさには変わることがない。しかるに、このようなレベルでの論議が、あたかも真理問題その事であるかのように巷はおろか、宗教人、信仰人の間でも論議されることはまことに憂うべきことである。

×

×

「無門関」という書に次のような一則がある。

言、事を展ぶること無く、語、機に投ぜず。言を承くる者は喪し、句に滞る者は迷う。

— 「無門関」三十七則 —

たしかに、「言葉」は「事実」を「展開」することは出来ず、「語句」は「機微」にふれない。「言葉」をそのまま「承」ける者は「事実」を「喪い」、「語句」に「執れる」者は「迷う」。出来事である現象を悟性的な分別知で語り論じてても、出来事が秘めている実有するものの事実が躍動している「こと」を見ることは出来ない。加えて、ますます自我の分別知に迷うばかりで

ある。それ故に、人が自我の分別に立って出来事を見ることの愚かを悔い改めるなら、その人は自我の底にある、即ち、出来事の底（底）にある「こと」に開眼することが出来るだろうにと、イエスは嘆かれた。

×

×

問題は自我による認識を絶対化するそこにある。人を身体と魂と霊とから成り立っている「一回的唯一の個体」であるとするとすれば、身体は周囲の事象が開示される仲立ちとなるものであると言えよう。また魂とは人が外界と関わる働きをする分別知と快や不快、満足や不満足、苦痛や喜びを感じさせる仲立ちをするものとも言える。そして、霊とは、外界の事象が秘めている、実有するものの事実あるという『こと』、即ち神的存在としての命の働きその『こと』に開眼させるのであると言える。このように身体と魂と霊とが健全に活性している「一回的唯一の個体」が、健全な神の創造に於ける人間なのである。しかし、人は身体的、魂的なそれだけを活性させることに意識を働かせる自我を構築し、霊性を欠落してしまつた偏向人間、つまり自我による認識を絶対化することによしとする者となつてしまつた。

×

×

このような偏向人間が正常な人になるための唯一の道は、自我の自我絶対化が破られ、欠落していた霊性の回復以外にどのような道もない。

では、自我の自我絶対化はどのようにして破られるのだろうか。はっきりしている一つのこと
は自我は自我を破ることは出来ないということである、それは自分の力で自分を持ち上げようと
するようなもので、どのような力持ちといえども自分を持ち上げることが出来ない。

自我を存在の中心に据えて、すべてを対象化して眺めるその自我は、自らを存在の外に置く神
にしてしまっている。このような自我絶対化の立場からは、自我膨張はあり得ても自我を破れる
状況は絶対に生じては来ない。いうならば自我絶対化の場からは宗教は永遠に生ずることはない。
なぜなら、神をも自我中心の対象論理の枠内で分別するからである。その場合の神は、自我の観
念が生み出した憧憬どうけいとしての神であつて、そこで営まれる神学はなんのことはない人間学に他な
らない。その意味で、バランスを失つた自我人間の膨張の行き着く所は人間失格という悲劇的な
破滅である。

人間に於ける靈性の欠落が、本来の人間性をどれほど歪め、人間を悲惨に誘つて行きつつある
かという事実を、人は気付いていない。

×

×

ここで、再び、わたしの体験を語らせていただきたい。それは一九七六年の秋のことである。
当時新築成った教会の二階の奥の部屋で、わたしは座して読書していたが、少し疲れたので庭の
方の窓に頭を向け、上向きによこになつた。そのとき、ちょうど頭上斜めにある窓に目をやった

とき、庭に植えてあるヒマラヤシーザーの樹のこずえが、その背景に広がる大空と共に自然に見えた。たしか青く澄んだ大空には秋特有の小さな雲が、二、三浮かんでいた。私は何思うでもなく眺めていたのだが、その時、突然わたしに一つの出来事が起こった。正しくは、起こったというのは後から自覚したことなのだが。とにかく、ヒマラヤシーザーと、それを眺めているわたし自身とが一つになったのだ。そして、さらに雲とも一体となったのである。否、ヒマラヤシーザーも、わたしも、雲もなく一つとなり、大空に溶け込んでしまったと言うべきかもしれない。それが、どれほどの時間であったかは、まったくわからない。ただ気がついたとき、私は独り言をつぶやいていた。「ああ、いままでぼくはまちがっていた。まちがっていた、それは、正にわたしにとつては、悔い改めの言葉であった。

×

×

私がこの体験を、教会の皆に教会発行の「週報」で公表したのは、体験後七年経ってからであった。何故それまで語らなかつたのだろうか。体験を忘れてしまったからではない。むしろ、その体験の重さが語ることを私自身に許さなかつたのである。体験その事は二十年経つた今でも鮮明であるが、その体験によって経験した「こと」は、時がたつに従ってより新鮮さを加えて行き、わたしをより確かな「命」へと導いてくれるような重さなのである。

出来事の現象を軽々に語ることは、出来事が秘め、それによって表現しようとする、実有する

ものの事実有るといふ命のたぎりとしての「こと」を、傷つけ、汚し、曇らせ、消し去らせ後退させてしまふ畏怖を感じていたのである。

×

×

この体験は、わたしにとって禅に於ける「公案」のようなものであった。寝ても覚めても、その体験を問いつづけ、靈的経験として自覚言語化したいと願った。その内に少しずつ出来事が秘めている「こと」の世界が自覚されて来た。それは、身体性と魂性とで構築していた世界の虚構性と幻想性とが実有するものの事実有るといふ命のたぎりとしての「こと」によって破られ、命のたぎりその「こと」がわたしに靈的自覚として直接に現成したのである。樹が有り、雲が有り、空が有る。それらを対象化する私という確かな存在があると思っていた。しかしそれは自我が造り出す虚構であり、事実は、樹も雲も空も私も実在するものではなく言わば命のたぎりとしての無なのである。そのような「無」だからこそ、樹であり、雲であり、空であり、私なのである。そこは全てが平等で恵みそのものの世界、まさに神の支配その「こと」のまつたき自由な創造に於ける自然だった。これはわたしの自我にとっては裁きであると同時に深い悔い改めをもたらした。自我が構築していた「我れ」が破られたのだ。そして「我れ」という自我の向こう側に放り出されたのである。そこは、もはや、我れ生きるに非ず、命のたぎりそのことが同時に我れであるような、即ち、キリストわが内に生きる、本当のリアリティの場そのものへの開眼であった。

まさに「古きは過ぎ去り、見よ、新しくなった」という他無き新生をわたしにもたらしたのである。

三 イエス・キリストとの出会い

あるとき、突然に「ヨハネ福音書十五の十六」という、言葉ともイメージとも分かちがたいものが、胸でとも頭でとも、これまた分かちがたい状態で私自身にひらめいた。当時、その聖書の言葉が何であるかが記憶になかったので、そのままにしておいたのだが、「ヨハネ福音書十五の十六」がしきりに気になり、二、三日してから促されるように、その箇所を聖書に探して驚いた。そこにあつたのは次のようなイエスの言葉である。

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけ、行って実を結び、また、わたしの名によって父（神）に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。

×

×

これはまさしく、わたしに対するイエスの語りかけ、呼びかけとして素直にそれを頂くことができた。それまでの私は決して素直でなかった。それは偶然であり、さもなくば無意識下に覚えていたその言葉が、ある種の願望によって意識化した現象に違いない、と批判的に受け取つただろう。しかし、そのときは違つていた。疑問も批判も一切入る余地など無いほど直接的であり、分別以前の素直さで言葉を受け入れた。そのとき、喜びと確信とが、自分の内の最も深いところから沸き出てきた。それは、小躍りこおどするようなものではなく、重厚な安心を秘めた静かな喜び、力、確信であった。それ以来、確信と平安とが、そのイエスの言葉と共にいつもわたしの日々の歩みの底すに「支え言葉」として響きつづけている。

×

×

このイエスの語りかけには二つの秘儀がある。一つは「選び」の秘儀であり、もう一つはイエス・キリストの名によって祈ることの偉大な秘儀であるが、今は「選び」の秘儀に注目してみよう。

あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選び、そして立てた。

これは、凄い語りかけである。私の分別が、わたしを越えた方、即ち神に、完全に包み込まれている。松下が神に包み込まれ神の手足となって立てられている。これは畏るべき、秘儀としてのわたしの現実の開示である。

神を知るとは神の秘儀の世界に開眼させられるということである。それは同時に自我による分別の世界を越えるという意味での自己否定が生じることであろう。先のイエスの言葉で言えば「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだ」ということ、即ち、すでに述べた語り口で言うならば、「出来事が秘めている実有するものの事実が躍動している『こと』」に開眼するということである。

× ×

人の一切の思いに先立って、事実躍動している神の命がある。この事実についてイエスは簡単明瞭に提示された。

父（神）は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる。

— マタイによる福音書五章四五節 —

その人が悪人か善人かという事柄に先行し、また、その人が正しいか正しくないかという事柄とは一切関係なく、まず初めに、神の絶対的な働きがある。この事実は一切の存在の原場であり、創造に於ける自然そのことである。「選び」とは、との事実の開示にほかならない。故に、もし

「選び」という事柄を、「独立した一つの命題」としてとらえるなら、とんでもない自己傲慢に陥ってしまうか、観念的な概念の遊戯に墮^だしてしまふ。事実、聖書の「神の選び」や「神の予定」の信仰論議がそのようになった経緯をキリスト教教義の歴史の変遷の中で見ることが出来る。それ故に「神の選び」について使徒パウロはヤコブ（イスラエル）の出来事を示し次のように言う。

リベカが、一人の人、つまりわたしたちの父イサクによって身ごもった場合にも、同じことが言えます。その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いこともしていないのに、「兄は弟に仕えるであろう」とリベカに告げられました。それは自由な選びによる神の計画が人の行いによらず、お召しになる方によって進められるためでした。……これは人の意志や努力ではなく、神の憐みによるものです。

—ローマの信徒への手紙九章十節〜一六節—

「選び」は人の意思や努力でなく、神の一方的な憐みの出来事としての秘儀であるとパウロは言う。

×

×

とにかく、「神の選び」という出来事は、一切に先立って神の全く自由たる主権と絶対的な支

配の開示であり、すべてはその神の主権と支配との結実または証拠であり得ても、それは根拠でも条件でも無いことである。「それは、だれも誇ることはないため」であり、「神が前もって準備してくださった善い業」を行って歩むためであると、パウロはエフェソの信徒への手紙二章九節以下で述べている。

パウロは「選び」ということを論理的に説明しようとしたのではなく、「選び」という出来事の中に論理的な組み立てを越えた、神の人に対する秘儀を靈的に直接経験したのである。それ故に彼は手紙の冒頭に必ず「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となつたパウロから」と記して憚はがらなかつた。

人はだれでも、すべて神に選ばれ召されて今在る。例えば「職業」はそのまま神による「召命」なのであるという理解は、現代人がどのような職業観をもとうと、根本的には正しい。もし正しくないというなら、企業家も含めた職業人の職業観又はその倫理観がその本来の道から外れてしまった結果だと言えよう。それはそのまま現代人の人生観、世界観の歪みの現れだと言えるが、このことについては今は論ずる場ではない。

とにかく、「ヨハネ福音書十五の十六」のひらめきは、私がわたしに対して生きているのも

なく、また、私が神に対して生きていくのではなく、神に生かされているという、わたしの存在の秘儀の明確なイエス・キリストによる直接経験としての開示であった。重ねて言うが、それは頭、即ち分別の場としての魂で了解したのではなく、わたしの霊に響き、その響きをそのまま霊で了解したのである。

×

×

その出来事は、わたしの過去のいくつかの事を想起させるきっかけとなった。その一つは、十五才の頃、第二次大戦の末期、中学生以上の者はすべて軍需工場に動員させられていた。私も工場に駆り出されていたのだが、其処に同じように徴用工として来ていた十五才に近い方から、十二センチ大のイエスの御身像付き銀メッキした十字架を説明抜きで突然に渡されたのである。当時わたしはキリスト教については全くの無知であった。イエス・キリストという存在すらわたしは知らなかった。それまでの私の周囲にはキリスト教を感じさせるものは一切なかったし、国家権力は敵の宗教として排斥し、戦後知った事であるが、当時の教会は様々な弾圧を権力から受けており、犠牲者も出ていた時代である。

個人的にも時代的にもそのような状況の中で、所謂「キリスト教」という形ではなく、イエス・キリスト、しかも十字架にかかっておいでになるお姿をリアルに表した、大きい御像付きのそれを突然、手にしたのである。それが、イエス・キリストに、お出会いはじめであった。そ

の十字架を私は”どっしり”重く受け止めた。その時の感触が今もおぼろに記憶の中にある。

わたしはその時以来、なぜか、紐を付けて肌身放さず持ち歩くようになった。歩を進める毎に少し重さを感じる十字架が私の身体に感触していた。しかし、教会を探して行こうとは思わなかったし、ましてや、キリスト教について考えようとしなかった。ただ、その十字架を自分から放すことはなかった。

その後間もなく終戦となったのだが。そんなある日、身に付けていた十字架が無くなってしまった。どうした事かと考えていたが、どうやら、通学の途上、駅まじかに電車が来るのを見、急いで駅に向かって走っている間に、十字架に付けていた紐が擦り切れて落としてしまったことに気付いた。それから半年程経ってから、キリスト教の集会に参加しなくてはならないことが起こった。それは正に晴天の霹靂であった。

×

×

人の一切の思いに先立って、人はすでに神との関係にあらしめられている。その人が善人であるか悪人であるか、また、特定の宗教を持ちその信仰に生きているか否かということに先立って、人はすべて神との関係に生かされている。これは神による有難き大決定なのである。

この有難き神の大決定については、イエスが語られた「王の婚宴のたとえ」に於いても知ることが出来る。

…王は家来たちに言った。「婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。」そこで家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王は客を見ようと人つて来ると、婚禮の礼服を着ていない者が一人いた。王は、「友よどうして礼服を着ないでここに入つて来たのか」と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。「この男の手足を縛つて、外の暗闇に放り出せ、そこで泣きわめいて齒ぎしりするだろう。」招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。

—マタイによる福音書二二章八節以下—

×

×

言うなれば、人は、善人も悪人もみな「神に招待されている関係」にある者なのだ。

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。

—マタイ福音書十一章二八節—

人が人である有難さは、先ず、この神との関係にある、という事実を決して忘れてはならない。

この事実が、どれほど偉大な事、畏敬すべき事であるかということ、知らず、気付かずに生きている事ほど「もつたいない」ことはなく、「不幸なこと」はない。そればかりか、それは、まことに「罪深い」ことなのである。

しかし、人はこの神の有難き大決定を自分の存在の原場としないで、自我が価値あるものと認められた価値、それがたとえ特定の宗教であり、高潔な主義主張であり、その行動力であったとしても、それらを最後の拠り所として、自己の生を保持し、進め、完成させようとしている。しかし、そのような生き方はまさに「根無し草」「浮き草」のような存在であつて、行き着くところは、波に吞まれて空しく消え失せるか、遂には枯れて朽ち果てるだけとなる。

×

×

先ず神の愛があり、その愛の内で万物は創造され保持され、完成されていく。いかなるものも事も人も、その神との関係を離れて、それ自体では在り得ないという神の大決定の内に存在している。これこそ、創造に於ける自然に他ならず、言葉の厳密な意味での「有難きこと」なのである。人がこの事実を目覚めるなら、気が狂わんばかりの歓喜と、絶対の平安と、全き謙虚を自ずと得るにいたる。しかし、人はこの神との有難き関係にあることを知らず、気付くことなく、自我の世界を彷徨い歩き、その中で正義を立て、神を立て、宗教を立て、さまざまな価値を作り、それに生きること満足しようとする。しかし、それらは所詮、虚しい努力に終わり、最後にな

にも得ることはなく、必ず絶望に終わる。このような人間の姿を、先にイエスは「礼服を着ていない者」と言われたのである。

×

×

すべての者が等しく神に召されている。この有難き神との関係に開眼する者のみが「礼服」を身に着ける。それは、強いられてでもなく、強いてでもなく、ただ、わが身をも心をも放ち忘れて、神の有難さの中にある自分を歓喜し、神の方より行われて、これに従い自らを持つて行くとき、力むことなく、分別することなく、生死を離れて、永遠の命と化すのである。これは、創造に於ける人間の自然なのだ、ということを確認しておきたい。この命のたぎりこそ、「神の支配」そのことなのである。

その意味で、召されている自己に、真実開眼した者だけに「選び」は成就するのだと言えよう。しかし、世間を見るとき、まことに残念なことに、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」。だからこそ、「召されていること、選ばれていることを確かなものとするように、いつも努めなさい。」と、ペテロの手紙Ⅱ一章十節は語る。神の支配に生かされている人間の原場[・]に開眼した者にとつては、「召されている」ことと、「選ばれている」こととは同時なのだということに気付く。この自覚に生きるそこに「宗教的実存」が現成するのであり、イエスの「幸いなかな」と言われる世界が開けて来るのである。

×

×

その意味で、「宗教」に開眼するとき、将来に希望が与えられるだけではなく、現在は勿論、過去のすべての出来事に神の召しと選びとの働きを見い出す者となる。その代表的な一人が使徒パウロである。彼は自分の過去を振り返って次のように告白する。

兄弟たち、あなたがたにはつきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。

あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年頃の多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのです。

彼は言う。「母の胎内にあるときから選り分け、恵みによって召し出してくださいました」と。それどころか、さらに彼は言う。

天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選りになりました。 —エフェソの信徒への手紙一章四節—

神の有難き大決定という自己の存在の原場の秘儀に開眼するとき、自己に関わる過去一切の出来事の秘儀が、天地創造以前にまで遡さかのぼって明確となる。そして、自己の命が宇宙意志キリストと一体であることに開眼させられる。これこそ「キリストわが内にありて生きる」命たぎる歓喜の世界なのである。キリストに生きる宗教的生の面目はここに窮まる。

×

×

「松下君、僕と一緒に来てくれないかな」と、先輩のNさんが懇願するように言った。事情を聞くと、大先輩であるI元小学校長が自宅で聖書を学ぶ集会を開いていて、是非参加して下さいと招かれ「はい」と言ってしまったらしい。わたしにとってもI元校長は大先輩になるわけだか

ら、家庭集会在どのようなものか全く知らないまま「行きます」とNさんに返事した。

当日、I氏はNさんが後輩の私を連れて集会に参加したので、大喜びで迎えてくださった。八畳ほどの和室に入ると、床の間を背にして白髪の老人とその横に三十才過ぎの女性が座敷机を囲んで座っておられた。後で知ったのだが、お二人はI氏の教会の牧師と副牧師であった。その他にI氏の奥様がおられるだけで、集会は始まった。

「賛美歌を歌います。〇〇番」と言われ、私は貸して頂いた賛美歌の本を初めて手にした。その後は素直な思いで導かれて行った。今、振り返ってその時のことは殆ど忘れてしまったが、ただ一つ、初めて聞いた賛美歌だけが、強烈な印象として残った。目を静かに閉じて、呻くが如く、祈るが如く、そして、ゆっくりと味わうように、節を付けて賛美されるI氏の表情が、そのメモディーと歌詞と共に郷愁を帯びてわたしの胸に、今も懐かしくよみがえって来る。その賛美歌は五二二番であった。

人は、ただ、願ひ努力したから、それが成るのではない。だと言つて、何も為さず待つていてもそれは成らない。「人の計^{はか}らいを越えた時」が満ちてこそ、すべては起こり成るのである。ここに人生の不思議があり、生きることの深さがある。

×

×

たしかに、ものごとが起こり成るには原因がある。しかしその底に因果の枠を越えた大いなる命の働きがある。

その大いなる命の働きの場では「我れ」は消えている。その意味で、因果の法則に生きている者ほかの世界は「我れが計らう」世界であつて、それはいつかは消えて無くなつてしまふ。即ち、過ぎればすべては夢、という世界である。しかし、大いなる命の働く世界は決して夢ではない。その命の働きこそ、「我れ」の底で「我れ」を越えて「我れ」を成り立たせ、限りなく「我れ」を肯定しているのだ。この命のいとなみ、命のたぎりをイエスは、直接に示し次のように語られた。

だから、言つておく、自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父（神）は鳥を養つてくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだが、思ひ悩んだからといつての寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言つておく、榮華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つ

てはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ。だから、「何をたべようか」「何を飲もうか」「何を着ようか」と言つて、思い悩むな。それはみな、異邦人（神を知らない人）が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのもののみがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国（神の命たぎる働きの事実）と神の義（神の確実な肯定）を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。（一）内は筆者の挿入。

— マタイによる福音書六章二五節以下 —

因果の法則の「我れ」にだけ生きる者には「思い悩み」は消えることはない。しかし、大いなる命の働きの事実（まこと）に開眼する者は、「思い悩む我れ」の底（こ）に、「我れ」を越えて「我れ」を限りなく肯定する芽ぐみ育む命のたぎりを知る。まさに、それは「芽ぐみ」即ち「恵み」なのである。「我れ」が計らう以前に「我れ」を絶対肯定している大いなる命の働き、即ち神の恵みがある。だから「思い悩むな」とイエスは言われる。

また、その事実は、あなたが心を貧しく、つまり謙虚にして、即ち「我れ」を消し去って自分の周囲を「注意して見るなら」、特別な修行をしなくても、いつでも日常の場に、それを見いだすことが出来る、とイエスは、言われた。それが、「空の鳥を見なさい。……」であり「野の花

をよく注意して見なさい。……」ということである。

そして、それらのことを集約して語られたのが「心の貧しい人は、幸いである。天の国（神の命の働き）はその人たちのものである」である。

×

×

大いなる命の働きに開眼したそれを「宗教心」と言うなら、「宗教心」は、決して「我れ」から起こるのではない。「我れ」から起こり成るものは、「我れ計らう世界」「思い悩む我れ」の世界内での出来事である。使徒パウロの言葉で言えば「肉に従う者は肉のことを思う」その思いの内から生まれて来た「宗教心」であって、真実の宗教心とは全く異質なものである。彼は「肉の思いは死であり」「肉の思いは神に敵対する」と言う。（ロマ人への手紙八章五節）「肉から生まれる者は肉である」とイエスは言われた。（ヨハネによる福音書三章六節）これは真摯に求道して来たユダヤの議員ニコデモに語られたイエスの言葉であるが、彼に次のように教えられた。「はつきり言っておく。人は新たに生まれなければ、神の国（神の命たぎる世界）を見る（体験すること）は出来ない」と。ここでイエスが言われる「新たに」とは、「根源的に、且つ神から」ということであって、要するに、「宗教心」は、神の働きに於いて起こり成ることである。それは他でもなく、肉に在る自我（我れ）が死に、大いなる命（神）に生かされるということである。イエスはそのかんの事情を「自分の命を救いたいと思う者は、それを失い、わたしのため

(大いなる命のため)に自分の命を失う者は、それを救う」と、提示なされた。(ルカによる福音書九章二四節)これに関しては、かのエックルハルトが「我々が自己を無にすればするほど、そこに来たって神が満たす」と語ったことは衆知のことである。その意味で、眞の宗教心は神の働きであると同時に、それは神の呼び声に於いて成り立つのだと言える。

×

×

神の呼び声は天から来る。しかし、それは幻聴として個人に聞こえるのではない。人を通して、さまざまな出来事を通して神が働かれるのである。そしてその働きは、受ける者には絶対の否定という形で迫って来る。西田幾太郎的に言うなら、「われわれの自己は、死によつてはじめて神に逆対応的に接する」のである。

正に、そのことが私に起こった。

×

×

「ごめんください」と言う声が聞こえた。たまたま自宅にいた私が玄関に出ると、そこに一人の男性が立っていた。丸顔でやや大柄なその方は、親しそうな笑みをわたしに向けながら、「先生の紹介でお訪ねしました。」と丁寧な挨拶をされ、一枚の名刺を出された。「はい」と言いながら、私は名刺を受け、見ると、肩書と氏名、それに住所が記されてあったが、なぜか肩書の部分に黒インキで縦に三本線が引かれてあった。つまり抹消されてある。その部分をよく見ると、

「同志社大学神学生」と読めた。これがE先生との初めての出会いだった。

先に、私がN先輩に連れられてI先生の家庭集会に参加したことを記したが、その後、京都市内の東山区にあるI先生が属しておられるS教会の礼拝に、友人と参加したのだが、三回程出席して行かなくなっていた。特別な理由はなかったのだが、後から振り返って見て、改革派系のその教会の礼拝式に、私が馴染めなかったということが一つあったと思う。それに加えて、まったく内容も無いのに哲学青年を気取っていた生意気で自我の強い、その頃の私には、礼拝、とりわけ遜へりくだって神に祈る方々の姿がとても弱々しく感じられて、反発と批判の目で見てしまったのだと思う。

×

×

そのような私を打ち砕いたのが、E先生の信仰人としての生き方、在り方であった。先生は理屈の人ではなかった。本当に神を信じて生活をしている人であった。毎朝早朝に起き、水をかぶり、祈るべき人の名前を書いた祈禱帳を持ってその一人一人の名前をあげて執り成しの祈りを捧げられていた。視力が弱くなった老人のためには聖書を筆で書写して届けられた。祈るときには全身全霊で祈られた。わたしはその神学の深さではなく、神を信じる深さの凄まじさに圧倒されたのである。

今、思い返すと、いろいろのことがあるが、その一つに、路傍伝道がある。ある所で、人々が

集まるからといって、サーカス小屋の横、じんたの響き盛んな其処で、なんと大声で福音を情熱込めて語り出されたのである。とはいえ、決して熱狂主義的な信仰の人ではなかった。神を信じ愛し、人を愛した愛の人であった。

とにかく、私はその信仰の息吹に圧倒されたのである。言うならば、神は、E先生を通して、その大いなる命の働きを提示し「計らう我れ」を打ち砕きたもうたのである。これが私の第一回日の悔い改めであった。

×

×

神の働きはそれ自体の直接性に於いて生じることはない。神の働きの直接性などあり得ない。それは、誰も「私は神である」とは絶対に言えないということでもある。また、この世のどのような物事も神そのものではない。即ち両者は実体的に同一ではない。しかし、一方に於いて、この世の人を含めた物事に於いてこそ、人は神を知る。先にも紹介した「空の鳥をよく見なさい。……野の花がどのように育つか、注意して見なさい……」とイエスが言われるとき、それは「空の鳥」が命している姿、「野の花が」命している姿のそこに神の恵みの手を見なさい、と言われるのである。ここでイエスが「見なさい」と言われる意味は、しっかりと「見透す」「見抜く」「本質をつかむ」又は「宗教的な直観的把握」のことである。しかし人は見るには見るが見ず、聞くには聞くが聞かない。鳥や花を見るに、ただ鳥を感覚的に又は理知的に見ることで「見た」

とするだけである。かくして人は結局、鳥も花も「見る」ことはない。

しかし、イエスは、空で命している鳥を見よ、と促される。野で命している花を見よ、と促される。真に、花や鳥を見透し、見抜くならば、神の支配、神の恵みの御手を直接経験出来ると言われる。

×

×

使徒パウロは言う。

キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。

—ローマの信徒への手紙十五章一八節—

たしかに神は人を通し、物事を通して語っておられる。しかも、その時々に対応しい仕方、対応しい者を遣わし、私たちの魂の覚醒をうながされる。まことに、神の働きの智慧は深く、その定めたもう道は究め理解することは出来ない。

×

×

その意味でE先生との出会いは偶然ではなかった。対応しい時に対応しい方法で導きたもうた

神は、わたしの霊的な成長のための決定的な一区切りのときとして、わたしの前にE先生を遣わされたのである。それは、I先生の祈りに神が応えたもうたということでもある。また、御像付きの十字架をわたしに下さったその方をも神は、わたしへの語りかけの始めとして遣わされた人であったと言える。まことに神のなさることは時になつており、人知を越えた愛に満ちている。その働きは今も変わらず、永久に変わることはない。それ故に何時も喜び、すべてのことに感謝し、絶えず祈るのである。

×

×

E先生の訪問をうけて二カ月程してからその教会の礼拝に参加するようになった。それは古びた二階建ての家の教会で、一階は保育所として使われ、日曜日にはそこが礼拝の場となった。集う者は多くはなかったが、礼拝の講話での聖書の解き証しは霊的で熱い語りであった。それから一年も経ただろうか、わたしはキリスト者として生きる決断をなし一九五一年十二月二十一日洗礼を受けた。二十才の時である。その後、熱心に教会に通うようになり、E先生の書齋に積み上げてあった雑誌を読むことを通して所謂「キリスト教」を学ぼうとした。その雑誌は後に「福音と世界」として発行される以前の「基督教文化」と「福音と時代」というキリスト教の専門雑誌であった。

熱心に書齋に行く私は時として失礼をしていた。ある時など、ご夫妻が寝ておいでになる枕元

を通つて書齋にずかずかと入つて行くような非常識なことをした。今思い返し赤面のいたりである。しかし、E先生夫妻は私を大切にしてください、時間に關係なく訪ねる私は度々昼食や夕食を共になし、いろいろと話を聞いてくださり聞かせてくださった。

×

×

後で少しづつ知るようになったのだが、E先生は徴兵により陸軍の幹部候補生となり中国の東北部、当時の満州方面に出征し、終戦となり、様々な苦難の後、九死をくぐり抜け一生を得、一九四六年秋に日本に帰国した。その体験が自分の死と生との問題に対峙させることになり、その解決を求めて宗教へと導かれ、最後に求道を聖書に得て、決心して同志社大学神学部にすまれたのである。それが二四歳の時であつた。と同時に宣教を開始し、神学部二年生のとき日本キリスト教団世光教会を設立された。時に二六歳であつた。わたしの家に尋ねて来られたのはその後間もなくの頃であつた。

これらのことを知つて、最初に出会つた時に受けた名刺に神学生云々の文字に線が引かれ抹消されていた理由が了解出来た。

その後、先生はエリイ・スタンレー・ジョーンズのクリスチャンアシラム運動に共鳴し、教派を越えて、ただ聖書の御言葉の静聴をとおして靈性を養い、キリストの福音の救済に共に与かろうと教会に留まり業を進められたが、一九七五年ついに教団教会から退き、その業の為に献身

された。その後、日本の各地は勿論、海外にもその運動の輪を広げられたが、ブラジルへ向かう途上健康に急変を来し、アメリカのロスアンジェルズで天に召された。一九七七年七月二十七日先生五十二歳であった。小説家三浦綾子氏はE先生の信仰人としての生き方に感銘し「ちいろば先生物語」を著した。

×

×

先にも記したが、E先生は信仰の人であった。本当に神を信じていた。だから神に委ねて生きる人であった。正しい信仰の人は狂信、妄信の人ではない、また、信仰の理屈を振り回すだけの知識の人でもない。その信が深い知恵に支えられ、また、その知が深い信仰に支えられていなければならぬ。つまり、信仰の人は信知の人なのである。私がE先生から学び得たことは「信と知」とさらに「愛」という人間の生き方であったと言える。

さらに、先生は真の教会（エクレシア）の実現を願っていたのではないかと思う。その姿を、組織を持たない、言わばキリストに結ばれる信仰による一期一会の集いである「アシユラム」に見いだした故に、その運動に命を捧げたのであろう。そこには、宗教組織としての教団教会の様々な限定の枠内では、その実現をはたせないという、積極的な自己反省と消極的な批判とが秘められていたと思われる。

E先生の信仰と宗教理解の底には、父なる神への徹底した「信」があり、その「信」のところ

では、組織的宗教や教团的教会信仰は消えて無くなり、ただ躍動する神の命に生かされる人の姿があるだけということになる。しかし、それは、そこに留まるためではなく、そこを原場としてそれぞれが生かされなければならず、そのような生であることが神の御意志であり、そのような生のために「アシユラム」即ち「退修」の運動を、教団を出て推進していったのだと思う。このような信仰理解には、一のことを一とし、二のことは二とする健康な洞察があり、一のことから二が流出してくるという自然性がある。

私がE先生から頂いたことは、先に述べた「信」と「知」と「愛」に加えて、「一なることは何か」ということと、「一を一とすることによって二は付け加えられる」という大切な一点だった。

その「一なること」をイエスは次のように言われた。

何よりも先ず、神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

— マタイによる福音書六章三二節 —

「神の国と神の義」とは、人の計らいを越えて、神がその御心のままに実現へと確実に働きたもう命そのものの事である。即ち、すべてを創造し、保持し、完成させずにはおかない命そのもの

の働きのこそ、神の国であり、神の義なのである。その神の命のたぎりこそが「一なること」である。それ以外は全て「二なること」にしかすぎない。

×

×

その後、私は私の状況のもとで求道の道を歩むことになったが、その根本のところには、先生によつて蒔かれた信仰の種が芽生え育ち、今も私の中で成長を続けている。その意味で、E先生はキリスト・イエスとともに私の内にいると言えよう。

四 無視出来ない問題

私は一九三一年生まれである。同じ年に満州事変が勃発した。それは日本がその後十五年に及ぶ戦争のどろ沼にのめりこむ第一歩であり、同時に、国家権力による思想の弾圧が始まる暗黒の到来でもあった。それが現実のものとなつて現れたのが一九三三年におこつた「滝川事件」である。

京都大学法学部教授滝川幸辰氏の著書「刑法読本」を、国家が発売禁止の処分をおこない、時の文部大臣鳩山一郎は滝川の罷免を要求した。それに対し京大法学部の教授以下全員が、文相の

要求は大学の自治を破壊するものであると抗議し、全員が辞表を提出したが、結局国家権力はそれを無視してしまった。

その後、日本は国家体制の軍事化を進め、思想の面では天皇を中心にした国家観念の強調をはかり、軍部主導によってアジアに向けた侵略を押しすすめる道に進んで行くことになる。こうして一九三七年には日中戦争が始まり、文部省は「国体の本義」を出し、一九四一年には「臣民の道」を刊行し、天皇を頂点とする日本の国がらが世界に冠絶していることを古事記や日本書記の引用などして国民教育を始めた。こうして、国民精神総動員運動を組織的に押し進めるとともに、日本こそ世界の中心であるという意味の「八紘一宇」を掲げ、その精神に従い生きるべく「臣道実践」が標語として国民に課せられた。やがて、大東亜共栄圏確立を名目に一九四一年、遂に太平洋戦争に突入していったのである。その結果は何百万人という死傷者を出し、日本は悲惨と廃墟の場となり一九四五年ポツダム宣言を受諾し、連合国に無条件降伏することで戦争は終結した。その時、私は十五才前になっていた。考えてみると、人格形成の土台となる青年前期までの十五年間、私は歪められた精神世界にどっぷり漬けられていたと言える。そして、それまでの積み重ねによって自覚的に自我を確立し始めようとした矢先に、過去の一切が崩壊し、否定されるような事態が起こったのである。絶対に敗れる事などはないという国体観を植えつけられ、そのイデオロギーの中心的存在として君臨していた「現人神^{あらひとがみ}」なる天皇が、「私は神ではなく人である」

と国民に向かつて自ら人間宣言をし、連合国軍総司令官マッカーサに頭を下げたのである。このように精神的支柱として来た天皇の権威がなくなり、かわって民主主義と平和が思想の基盤なのだということを、事もあろうに鬼畜にもまさる敵として教え込まれて来た米国を中心にした外国から示されたのである。

しかし、十五才近くの少年には、民主主義が何であり、平和の思想がどういうことであるかは、理解するには難しいことであつたし、また、誰も正しく教え導いてくれる者などいなかった。殆どの人々が不安と混乱の中にいたのである。

わたしの家は、宗教的には家のそれとして浄土真宗を名乗り、一方に神棚があり、さらにかまどの上には三宝荒神が祭られてあるような、言わば当時の平均的な家であつた。それでも母は信仰心があり、個人的には合掌することを厭わない人であつた。何かの時には願かけをして、お百度をふみに出かけて行つたが、そのおりには必ず末っ子の私も一緒だつたことを覚えている。そのうちに私は仏壇の引出しから「浄土三部經」などを取り出して、理解出来ないまま読むようになっていた。

そのような状況の中で、先に記したとおり、終戦直前に御身像付きの十字架との出会いがあつ

たり、I先生とのお出会い、続いてE先生との決定的な出会いをとおしてキリスト教に導かれて行ったのだが、その間に私にとって無視することが出来ず、牧師になつてのある時期まで引きずつていたことの一つに「マルクス主義」という問題があつた。

×

×

日本人にとって敗戦は、即天皇制の呪縛からの開放であつたと言える。しかし、雑誌「心」に集まつた所謂オールド・リベラリストとよばれる人達は天皇制擁護の立場をとつた。このような人達に比して明確に敗戦の必然性と現実認識を説明できたのはマルクス主義だけであり、従つてマルクス主義は敗戦後の論壇を風靡するに至つた。多くの知識人はその立場に立つて語り、多くの若者もそれに無関心でおれない状況があつた。私自身も、マルクス主義について十分に理解出来ないままに、発想の方法がその線上でなされる知識人の発言に影響された。しかし、本来のマルクス主義がどうであろうと、正当派を名乗る人達のそれには分からないままに、どうしても馴染めないものを感じていた。それは、それを説く人達や姿勢の中に教条主義的且つ自信に満ちた独善と熱狂的な偏向を感じていたからだと思う。

×

×

連合軍最高司令官マッカーサーは、日本の占領政策の一環として宣教師の大量の派遣を米国に要請した。その結果、プロテスタントだけで一九七三年までに二千五百人の外国宣教師が来日し

た。彼らは、様々なキリスト教教派の宣教師でありその聖書理解、信仰理解は保守的で、その教派の数は二百に及んでいる。しかも、日本の宗教も文化も知らない宣教師達が殆どであった。この事は、結果的には敗戦後の日本のキリスト教宣教に多くの問題を残すことになるが、今はその中には触れない。とにかく、敗戦により精神的な支柱を失うと同時に、飢えと貧困の中から立ち上がらねばならない厳しい状況に於いて、主権在民と戦争の放棄という民主主義と平和は、人々に生きる力を与えた。それを教え与えてくれたのが直接的にはマッカーサー率いる外国、特に米國と結び付けられ、その思想と生き方の根幹にあると思われるキリスト教に、人々はそれぞれの立場で、生きるよりどころとして強い関心を向けていった。

その意味で、白覚的、主体的に生きようとする当時の青年は、大げさに言えば「マルクス主義かキリスト教か」という二者択一の前に立たされていたと言える。

×

×

私の場合は結果的にはキリスト教に導かれて行った。しかし、マルクス主義に対してキリスト教徒としての態度を、自分なりに明確にしたいという思いは、先述のごとく長らく引きずっていた。その点で私に大きな影響を与えたのは、ベルジャウエフやブルンナー等の邦訳された書物とその解説書であり、丸山真男や大塚久雄などのものにも目を向けていった。とはいえ、未だに「資本論」すらまともに目を通していない私などが、「マルクス主義」を云々することはまこと

におこがましいかぎりであることは十分承知している。

いずれにしても、共産主義が科学的な社会機構変革の運動であるとはいえ、それは結局キリスト教の裏返しとして生れて来た地上天国望求型の熱狂的全体主義的宗教運動であるというブルナーやベルジャーエフの見解に共感する思いは今も変わらない。

しかし、マルクス主義的な発想に感化されて記された書物に接することによって、歴史的現実立って正しく批判的にものごとを見る目を少しは養われたのではないかと有難く思っている。

×

×

一方、一九四六年から一九四九年にかけて所謂「主体性論争」が盛んに行われた。十八才頃の愚鈍な私には論争の争点をすっかり理解しないまま、当時の思想情況の実存主義をめぐり生意気に仲間と議論するなかでしきりに「主体性」なる言葉をふりかざしていた。

主体性ということが敗戦後、心ある人達の思いに登場してくるには、それなりの必然性があった。それは、戦争の勝者も敗者も共に、世界的、人類的規模で無意味な戦争の悲惨さを経験することになったが、それを誰も止めることが出来なかったという人間の生き方の挫折と苦渋、ないしは、個人の思想的敗北の激烈な体験の反省から、戦後、世界的規模で個人の主体的な思想と行動を回復しようという主張のもとで、主体性が叫ばれ出したのである。この問題が日本に於いても「実存主義」という形で真剣に論じられるようになったのである。その思想の流れが、わたし

の前にも無視出来ないこととして登場してきた。

×

×

誰でも若き日に、もの見方や考え方に大きな影響を受けた人や書物との出会いがある。私にとって、聖書やE牧師との出会いは先に述べた如く決定的な影響を得たのだが、その他にキルケゴールや西田幾太郎、滝沢克己といった方々からも青年時代に影響を受けた。いずれも、私が十八歳過ぎの頃である。西田との出会いは「善の研究」に於いて、また滝沢との出会いは「西田哲学の根本問題」に於いてである。そしてキルケゴールとの出会いは「死に至る病」に於いてそれぞれ始まった。これらの書物は当時の文科系の学生にとっては、必読の書のようになっていたもので、珍しいことではなかった。しかし、今、思い返すとき、はたしてどれほどの理解が出来ていたか疑わしいかぎりであるが、確かなことは、これらの書物を通して得たことは、自分が自身として存在し、主体的（決断的）に生きている事実に即して納得出来る存在論的且つ、実存論的省察の方向づけであった。

このことは私のもの見方考え方を存在論的根源思考、又は実存論的思考に向かわせ、以後、私の宗教的求道の姿勢は今日に至るまで変わることなく続いている。

×

×

以上のように、私のキリスト教に於ける求道の姿勢は始めから存在論的根源思考、又は実存論

的型であつた。その点、後に神学校の学生になつてからも他の学生が多分に聖書の言葉に従つて忠実に生きようとする、言わば倫理的教条的又は規範的な求道の仕方と感じられたそれとは、基本的に相入れないものを覚えていたし、そのことについて深く語り合える友はいなかつた。又進んで語ろうとも思わなかつた。それは善悪、正否の問題ではなく、問題意識の差であつたと言える。このことに関しては、今も状況は少しも変わつてはいない。

I 分派のこと

キリスト者となつて最初に素朴な疑問として生まれて来たことの一つに、なぜイエス・キリストにおいて一つであるはずのキリスト教会に様々な教派があるのか、ということであつた。

大方の人は初めて教会に行く場合、訪ねて行つた教会がたまたまその教派の教会だつたということが多いのではなからうか。それは、私の場合も同じであり、教派を選んでその教会に行つたのではない。行つた教会がその教派の教会だったのである。そして、自分が参加している教会の教派を自覚するようになるのは、その後、他の教会の教派性に気付く時に自分が属している教会の教派性にも気付くようになる。そして自分が属している教会での求道生活に不満や疑問を特に